



○ 令和7年度鳥獣被害防止総合対策事業の事業計画検討会を行います

今年も早いもので、年末年始、そして翌年度が近づいてきました。鳥獣被害防止総合対策事業における各事業実施主体の翌年度事業実施計画を固めるため、12月上旬～1月上旬にかけて、関係者（実施主体、事務所農政課、野生イノシシ対策室の各担当者）参集のうえ、事業計画の検討会（ヒアリング）を行いますので、実施主体におかれては、資料等のご準備をお願いします。

複雑かつ多岐にわたる鳥獣交付金のメニュー。効果的に活用し、各地域の鳥獣被害を低減するためには、各担当者が膝を突き合わせ、ざっくばらんに話し合うのが一番です。「こんなことをやってみたいんだけど……」「これって交付金でみれるの？」

「これってこういう理解でいいの？」等、せっかくの機会なので、時間の許す限り、なんでも議題に上げていきましょう！

なお、整備事業を予定されている実施主体は、検討会に合わせて現地調査も行います。普段なかなか現場に行くことのできない野生イノシシ対策室の担当者にとって、地域の実情を知る貴重な機会です。お手数をおかけしますが、ご協力をよろしくをお願いします。



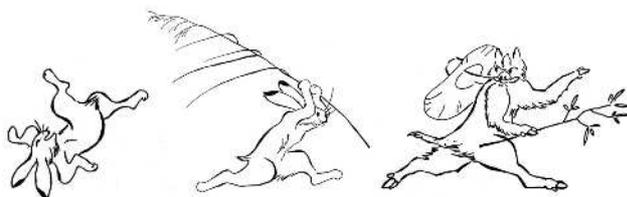
(NA)

現地調査の様子

○ 野生イノシシのアフリカ豚熱対策に関する関係者の意識調査

1 目的

愛知県野生イノシシ対策室では関係各位のご協力の元、「野生いのししにおけるアフリカ豚熱の浸潤状況の的確な把握と感染拡大防止のための基本方針」（以下「基本方針」という。）に沿った野生イノシシのアフリカ豚熱防疫措置の実施体制整備を進めています。基本方針に示される防疫措置は実働による検証を経たものではなく、多くの不確定要素を抱えながら防疫体制整備を進めることとなります。そこで、適切な体制整備の一助とするため、愛知県庁及び県内市町村役場職員を被験者(合計44名)として、階層分析法[※]を用いた意識調査を実施しました。





2 調査結果の概要

(1) 防疫措置の重要度

防疫措置としては死体対応の重要度ウェイトが最も高く、次いで拡散防止対策との結果になりました(図1)。一方、野生イノシシに特有な活動である積極的死体搜索は相対的に低い値となりました(図1)。このことから、死体対応の実施体制整備を最優先とすることで、関係者の円滑な合意形成が図られると考えられます。

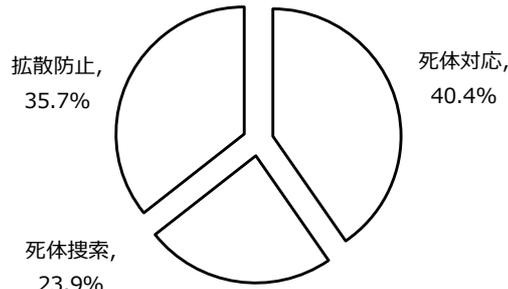


図1 野生イノシシに対する防疫措置(死体対応、積極的死体搜索、拡散防止)の重要度ウェイト

(2) 実施体制の評価

実施体制については、すべての防疫措置において、地域主導の優先度ウェイトが最も低く、否定的に評価されていると考えられました(データ表示なし)。野生イノシシの疾病対策は広域的な活動に発展する可能性が高く、通常の家畜防疫と同様の地域主導による実施体制は困難であるとの判断に至ったものと考えられます。防疫措置の重要度を反映した総合評価においても、地域主導のウェイトは国主導及び県域参集と比べて低い値となりました(図2)。関係者の合意形成に基づく実現可能の実施体制を整えるためには、できる限り広域的な実施体制の構築に向け、検討を進める必要があると考えられます。

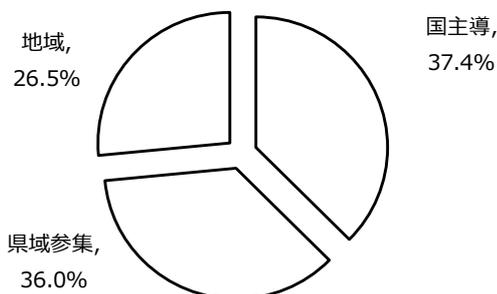
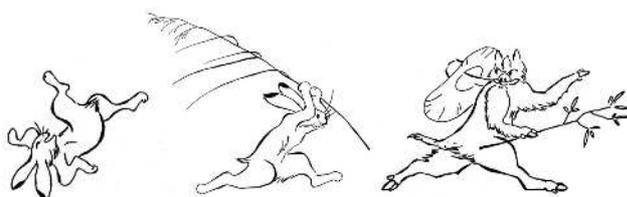


図2 実施体制の総合評価のウェイト





注) 階層分析法とは

AHP (Analytic hierarchy Process) と呼ばれる意思決定手法で、1980年に米国ピッツバーグ大学の T.L.Saaty 博士によって提示された。戦略的な方針決定のほか、公共事業の評価、マーケティング分析等に利用されている。目標に至る意思決定のプロセスを階層構造に分けて評価し、その結果を数学的に解析することで、偏った主観に左右されない総合評価を導く手法である。人間なら誰も持っている経験や勘に基づく感覚を組織的な意思決定に反映することが可能で、従来法ではモデル化が困難だったテーマを取り扱うことができる。

(TO)

○ イノシシの捕獲頭数について【2024年度第2四半期速報】

県内の有害鳥獣捕獲及び指定管理鳥獣捕獲等事業により捕獲されたイノシシの頭数について、2024年度第2四半期分（7月から9月まで）がまとまりました（表）。

第2四半期の県全体の捕獲頭数について、2024年度（速報値）は3,175頭と、前年度と比べ、やや増加しています。地域別に見ると、前年度と比較して、東三河地域は大きく減少、新城設楽地域は増加、尾張及び西三河地域はやや増加で推移しています（図1）。

捕獲頭数の累計値（第2四半期末時点）は、前年度と比べ、尾張地域、西三河地域、新城設楽地域で増加していますが、東三河地域では減少しています。県全体としては増加傾向にあるため、県全体、地域別ともに、今後の推移に注意が必要です（図2）。

表 直近3年度の地域ごとの野生イノシシの捕獲頭数（頭）

	第2四半期			第2四半期までの累計		
	2024年度 【速報】	2023年度	2022年度	2024年度 【速報】	2023年度	2022年度
尾張地域	434	383	404	599	517	571
西三河地域	1,992	1,832	1,729	2,639	2,157	2,378
東三河地域	381	614	425	571	722	527
新城設楽地域	368	238	345	561	377	489
計	3,175	3,067	2,903	4,370	3,773	3,965

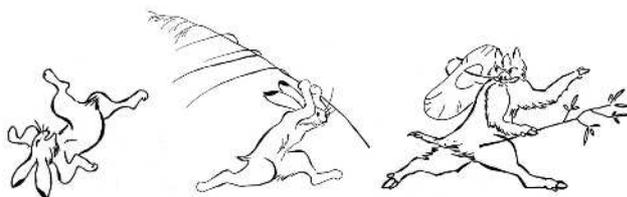




図1 野生イノシシの捕獲頭数の推移 (第2四半期)

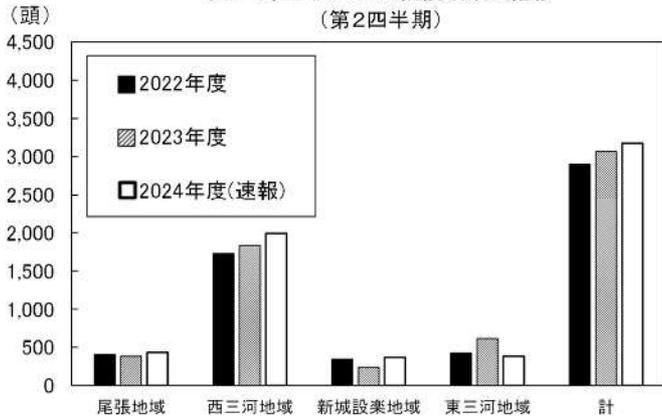
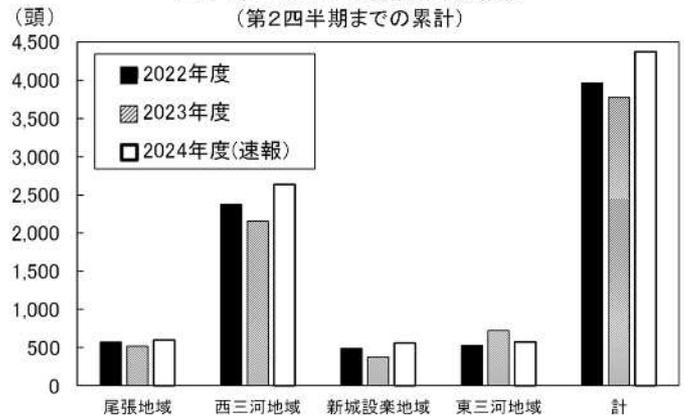


図2 野生イノシシの捕獲頭数の推移 (第2四半期までの累計)



(I Y)

○ 愛知県わな捕獲技術向上セミナーを開催しました！

愛知県では、野生鳥獣による農業被害が頻発していることを受け、その捕獲の担い手となる狩猟者の確保・育成を行っています。9月28日(土)に愛知県緑化センター・昭和の森(豊田市)において、わな猟の初心者等を対象としたセミナーを開催しました。参加者は20代から60代までの幅広い年代で、計19名の方に参加いただきました。

当日午前から、「狩猟免許の活用方法」、「イノシシの生態」や「わな捕獲の極意」について、現場のリアルな映像も交えた講義を行いました。また、午後からは、「中型獣の捕獲方法」を学び、屋外では、実際に使用されている大型獣用箱わなの見学や、中型獣用の箱わなの架設実習、くくりわなの架設実習を実施しました。

参加者からは、「細かく教えて頂きとても勉強になった」、「くくりわなについて教えてもらえる機会がなく、大変勉強になりました」などの感想がありました。

次年度以降も、同様のセミナー開催を予定しております。開催時期については、愛知県ホームページにて告知を行いますので、ご興味のある方はぜひご参加ください。



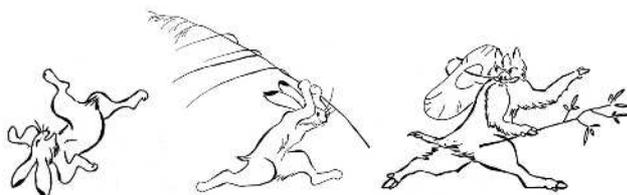
講義の様子

【グループワークで親睦します】



講義の様子

【道具の使い方などを説明】





大型獣用箱わなの解説の様子
【誘引餌の置き方にはコツがあります】



くくりわな架設実習の様子
【1人1つずつ、架設できます】

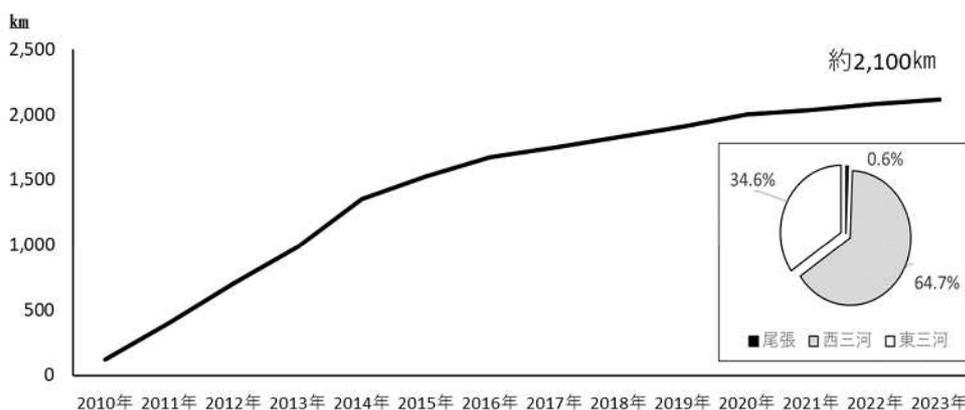
(I Y)

○ データで考える愛知県の鳥獣対策

鳥獣被害防止総合対策事業が開始されて今年で15年目となりました。里山にはワイヤーメッシュ柵（以下、Wメッシュ柵）が張り巡らされ、いたるところで捕獲檻を見かけるようになり、田舎の道の駅などではイノシシやシカの料理が出てくることも珍しくなくなりました。

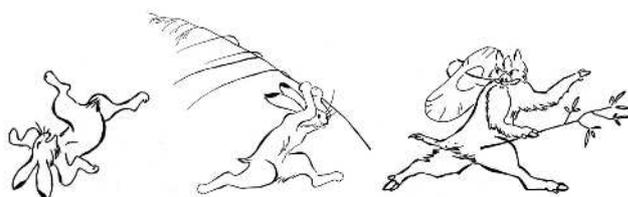
一方で、愛知県の鳥獣被害は収まる様子がありません。前号のとおり、愛知県の鳥獣被害金額は、ほぼ横ばいです。これらの対策に効果はあったのでしょうか？考えてみました。

1 侵入防止による対策



愛知県のWメッシュ(+金網)の導入距離(累計)

こちらは、これまでに鳥獣交付金を活用して導入されたWメッシュ柵の総距離です。なお、「かさ上げ」の分も含まれるため設置距離ではありません。これまでに2,000 km以上も導入されました。2,000 kmとは、名鉄名古屋本線（豊橋-岐阜）を10往復するくらいの距離です。ちなみに、電気柵なども含めると、もっと長くなります。

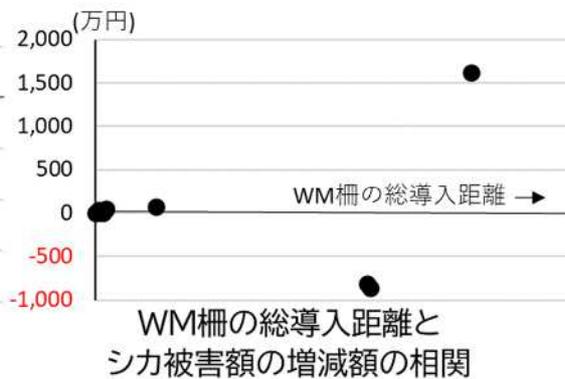
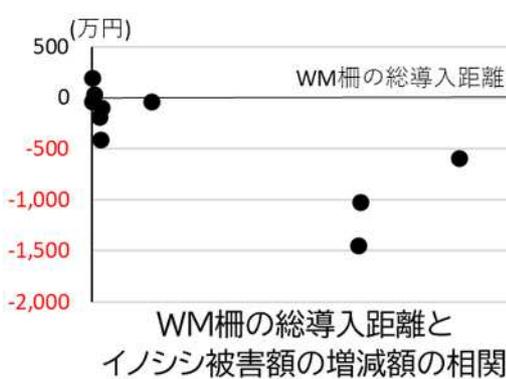


愛知県農業水産局農政部
農業振興課野生イノシシ対策室
お問い合わせ Tel.052-954-6726



地域別に見ると、西三河と東三河で2：1くらいとなります。尾張には、あまりWメッシュはありませんが、電気柵はけっこう導入されています。

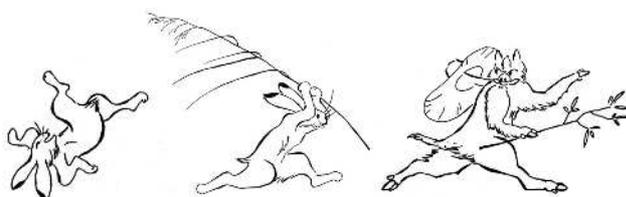
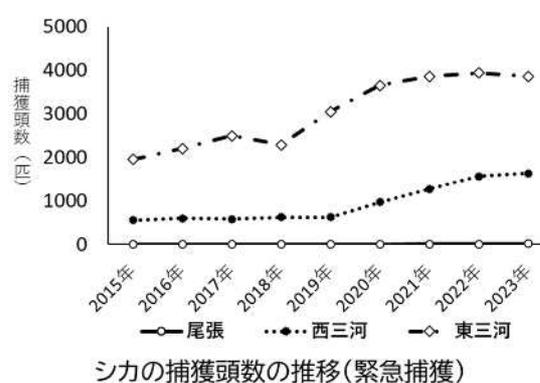
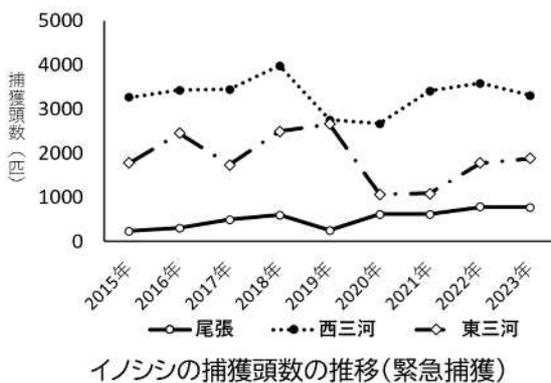
Wメッシュが効果を発揮するのは、主にイノシシとシカです。下図は市町村（協議会）ごとに、Wメッシュ柵の総導入距離と、導入前・後でどれだけ被害が増減したかを表したものです。なお、導入前とはその市町村（協議会）が初めてWメッシュ柵を導入する直前の3カ年平均で、導入後は直近の3カ年平均です。イノシシではWメッシュの導入後には多くの市町村（協議会）で、被害が減少しています。やればやるだけ、とはならないように見えますが、やった効果はあったように見られます。一方で、シカは明確な減少は見られません。この理由は、現場の声で何となく想像ができます。イノシシしか生息していなかった地域で高さの低いWメッシュ柵を導入したものの、後からシカが生息するようになり、飛び越えられるようになってしまった、ということであるようです。



これは筆者の感覚的なところになってしまうのですが、シカ被害を抑えることができる市町村（協議会）は、比較的早期からシカ・イノシシ兼用柵を導入した地域であるように感じます。耐用年数などの問題はあるものの、今後、シカに対応できる柵の導入が進めばシカ被害の軽減に繋がると考えています。

これから、どんどん、耐用年数が切れる柵が出てきます。つまり、再度、柵の設置をやり直すチャンスが訪れます。これまでの「こうしとけばよかった」を解消し、より効果的な柵に作り替えることで、さらなる被害軽減が図れるのではないかと思います。

2 捕獲による対策



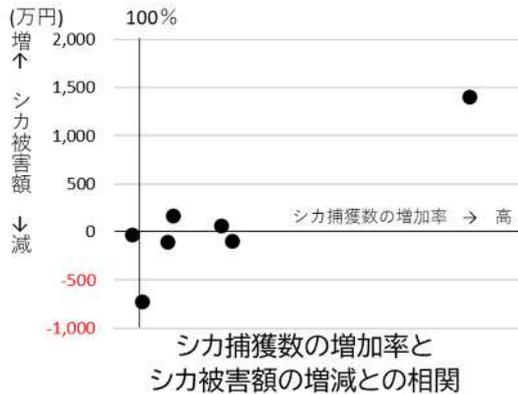
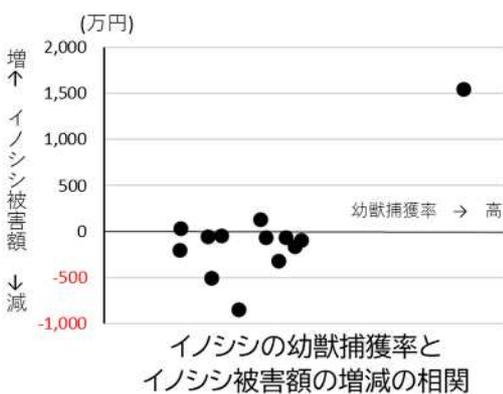
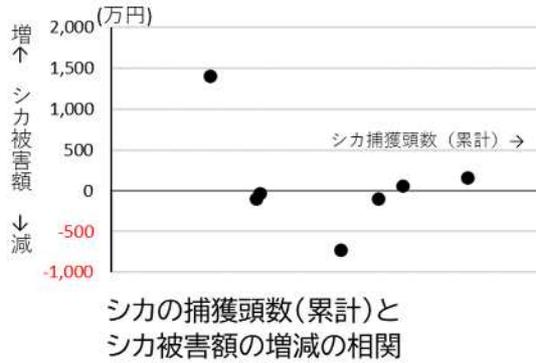
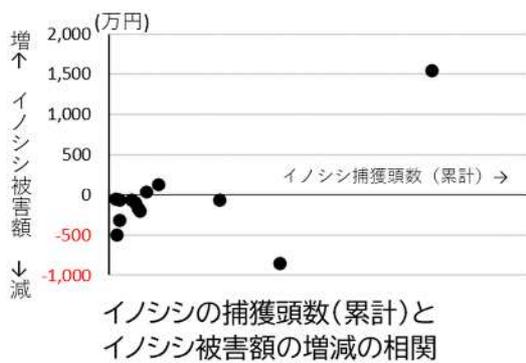


前頁の図は捕獲事業が現在の形となった 2015 年度から 2023 年度までの捕獲実績の推移を示したものです。イノシシの捕獲実績では、三河地域で横ばい、尾張地域で増加傾向です。シカの捕獲実績は全域で増加傾向にあります。なお、2019 年度以降では尾張地域でも捕獲実績があり、その後も増加傾向です。

イノシシは累計で 5 万 1 千頭くらいが、シカは 3 万 5 千頭くらいが捕獲されています。これまで継続して捕獲を続けてきましたが、その効果はあったのでしょうか？下図は捕獲事業の初期と直近で、事業を実施している市町村の被害額がどう変わったかを示したものです。なお、初期は 2015 年、2016 年の 2 カ年平均、直近は 2021~2023 年までの 3 カ年平均としています。

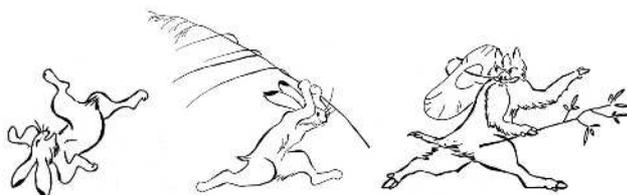
※2014 年以前の被害額と比較すると、柵の導入効果でマスクされると推測されたため 2015 年以降で比較

※2015 年以降に捕獲事業を開始した市町村および 2015 年時点で被害金額が 0 円だった市町村は除外



イノシシは「たくさん獲る」≠「被害低減」のように見えます。たくさん獲っても被害が減少しない所もあれば、上手くいっているように見える所もありました。この要因は今後分析する必要がありますが、少なくとも、幼獣捕獲率は低い方が良さそうです。

シカについては、捕獲数と被害軽減の関係性について、何とも言えない結果になりました。シカは獲ればとるだけ良いというイメージが強く捕獲数と被害軽減が顕著に結びつく





と思っていましたが、この結果は意外でした。シカの捕獲頭数は年々増加していることから本県のシカは増加傾向であると推測されるのですが、増殖速度に捕獲が追いついていないことが要因であると考えられます。実際、2015年と2023年を比べて捕獲数の増加率の高い市町村（≒シカの生息域が拡大したと推測される市町村）ほど、被害が減っていないように見えます。

3 まとめ

前号で述べましたが、イノシシの被害額は微減傾向にあります。この要因としては、柵の設置が進んだことが最も大きく、次に捕獲が進んだためと考えられます。一方で、シカの被害額は横ばい傾向です。早くからシカが生息していた地域では対策が進み被害額が減少している一方で、あまりいなかった地域で被害が拡大しており、結果として横ばいになっていると推測されます。シカについては、尾張や三河平野部に向かって拡大中であり、県全体の被害総額で見たら、もうしばらく横ばいが続きそうです。

(NM)

○ 編集後記

最近、ハクビシンをよく見ます。同じところでよく見るので、隠れ家が近くにあるのかな？ 1匹だったり、2匹だったり、ボス猫かと思うくらい堂々と歩いています。

Googleでハクビシンと検索したせいか、Youtubeでハクビシンを食べる動画が出てくるようになりました。中国では食材になるようですが、やっぱり臭いみたいですね。ジビエ肉の通販サイトを見ても「上級者用」と書かれていました。さすが麝香猫ですね。ぜひ誰か、体験談をお聞かせください。

